

否定とモダリティ形式
ーモダリティ形式としての「てほしくない」に着目してーThe Interaction Between Negation and Modals:
Focusing on “*te hoshiku-nai*” as a Modal Expression

牟田 綾

要旨

「てほしい」には「ないでほしい」と「てほしくない」という二形式が否定形として存在するが、これまで定量的に実態を分析した研究はなく、その差異について十分に示されてこなかった。本研究でコーパスの用例を中心に分析した結果、「てほしくない」は動詞が表す事態や行為の兆候が必要であるのに対し、「ないでほしい」にはそのような制限がなかった。これは「てほしくない」が、否定形式が一般に有する制限を受けていることの表れであり、「てほしくない」は「ないでほしい」に比してモダリティ形式としての確立度が高くないことに起因すると考えられる。さらにこの基準は、前接する動詞により形式の選ばれやすさに差が生じることに作用する。

また、動作・事態の引き起こし手の表示形式を調査した結果、「てほしい」の統語的な否定形式は「てほしくない」であるといえるが、「てほしくない」はその構造から得られる意味とは別の意味を表すことが確認された。

キーワード：二つの否定形式、モダリティと否定、「てほしくない」、「ないでほしい」

1. 問題のありか

動詞のテ形に補助的な形容詞「ほしい」が接続した「てほしい」の否定形式には、「ないでほしい」と「てほしくない」という二つの形式が存在する。

- (1) 今年もホワイトクリスマスになるでしょうけど、吹雪には{ならナイデホシイ／なってほしくない}です。 (「Yahoo!知恵袋」)

(以下、「ないでほしい／てほしくない」の部分について、実例をひらがな、作例をカタカナで記す。また、出典のない例文は作例である。)

(1) は形式を入れ換えても意味の異なりが感じられない。しかし、以下のように入れ替えると意味が異なったり、不自然な表現になる場合がある。

- (2) 「{驚かないでほしい／*驚いてホシクナイ}。実は、企画PR課というのは表面だけで、きみにスパイをやってもらいたいんだ(略)。」 (『会社を読む』)
- (3) 逆に、おかげで体調は回復したので{心配しないでほしい／?心配しテホシクナイ}という意味のことが書いてあった。 (『凍れる瞳』)
- (4) 「あなたは、これから世界を学んでいく人なの。でも、その先生に、テレビを{#選んばナイデホシイ／選んでほしくない}のよ。テレビを通して人生を学ん

でもらいたくないの」（『アメリカへ行った僚子』）

(2)と(3)は「ないでほしい」を「てほしくない」に入れ替えにくく、(4)も、テレビのリモコンに伸ばした娘の手を押さえつけ、必死に説得する母親の感情を表すには「ないでほしい」に入れ替えにくいと思われる。このような異なりは何に起因するのか。本稿ではコーパスのデータを中心に考察し、両形式の意味・機能を明らかにすることを研究課題とする。

2. 先行研究

2.1 「てほしい」 ―願望表現と依頼表現

「てほしい」の形式は、早くは永野（1958）で「依頼・要求」を意図する文型に分類され¹、その後もこの形式が＜願望＞と＜依頼＞の2つの機能を持つことや、機能を決定する条件等について論じられてきた。森田・松木（1989）は①他者が非情物の場合は願望を表す。②他者が有情物の場合は、他者自身の意志ではどうにもならない事情（無意志動詞）を受ける場合は願望、それ以外は依頼。③意志的な動作を受ける場合、他者以外の聞き手に話された場合は願望、直接他者に対して話されたのであれば依頼、としている。益岡・田窪（1992）は「依頼」を「直接依頼形式」と「間接依頼形式」にわけ、「間接依頼形式」に「～てほしい」を分類した。その後由井（1995）、宮川（1998）、三井（2007）、米澤（2015）等で、「てほしい」と「てもらいたい」の二形式の働きかけ性や待遇的意味の異なりが論じられてきた。

2.2 否定形式「ないでほしい」と「てほしくない」

一方で、否定形式に関する研究は管見の限り多くない。工藤（1979）は、江戸から昭和四十年代までの依頼表現の変遷を考察し、「てほしい」は希望表現としても依頼表現としても用いられるのに対し、「ないでほしい」は依頼表現、「てほしくない」は希望表現、といった「用法の分化が発達してきている」可能性を示唆した。また寺村（1979）では、「てあげる」などの授受動詞を補助動詞とした表現について「利益の授受行為自体についての否定は補助動詞の外側の否定形」になり、「授受の内容である行為の作為・不作為は内側の、つまり前の動詞の否定形となる」とし、「～シテホシクナイと、～シナイデホシイについても同じことがいえるだろう」と述べている。そのように形態のみを考えれば、「ないでほしい」は「命題の非存在を希望」し「てほしくない」は「願望の非存在」であるという論理で問題は解決するように思われるが、入れ替え可能なものと不可能なものがあることへの説明にはならない。また工藤（1989、2005）でも「「してほしくない」が希求の叙述文としての性格をより濃くとどめ」、「しないてほしい」は依頼・命令文としての性格を獲得しつつある」と述べられているが、調査では全体数²しか記されておらず、選択に関する疑問は残されたまま

¹ 「依頼」より強制力が強いのが「要求」だが、二つは対人関係や文が示す事態の内容などにより変化する連続的かつ不可分的な関係であると考え、本稿では「依頼」を使用する。

² 工藤（2005）では「しないてほしい」が374例、「してほしくない」が197例となっており、数の比率が本調査と異なっている。

である。

3. 本稿の立場 —モダリティ形式と否定

中右 (1979) で述べられるように、「モダリティは、命題あるいは相手に対する話者の、発話時という瞬間的現在における心的態度を表すのであるから、その本質において、モダリティが否定そのものであることはない。」ことに疑問の余地はなく、また「日本語には、モダリティと否定とが、分離不可能な固定表現を形造りながらも、内容の上では、モダリティ否定ではなく、命題否定であるような場合がある。」ことから、「てほしくない」も形式上は「てほしい」の否定に見えても、実際に表す意味は異なっているという論が導きだされる。

工藤 (1989、2005) にも、「してほしくない」は、形は「ほしい」という希求の否定であるが、意味的には、希求という気持ちの欠如—これは「してほしいの／わけではない」や「してほしくはない」が表す—ではなく、「しない」ことの希求である。」という指摘があるが、具体的な検証は記されていない。

そこで本稿では、両形式の異なりについて、以下のような仮説を立て検証を行う。まず、「ないでほしい」の意味については、その構造どおり「命題の非存在の希望」であると考え。一方で、「てほしくない」については、「願望の非存在 (ほしいという気持ちの欠如)」という構造から得られる意味ではなく、別の意味を担っていると考え。すなわち、「てほしくない」は「てほしい」というモーダルな意味の否定ではなく、「てほしくない」でかたまりとして、ひとつのモーダルな意味を担う形式として成立していると考え。

さらに、「ないでほしい」と「てほしくない」にはモーダルな形式としての確立度³に異なりがあるのではないかと想定する。先行研究で述べられているように、「ないでほしい」が<依頼>としての機能を獲得しているのであればモーダルな形式としての確立度も高いはずであり、そのことが両形式の意味機能や使用条件にも差異をもたらすと考える。

4. 本稿で扱うデータ

『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』よりアプリケーション『中納言』を使用し短単位検索を行った⁴。サブコーパスの指定は行わず全データを対象とした。その後データを1例ずつ目視で確認し、「値段を見ないで欲しいものを購入する」といった用例を排除し

³ モーダルな形式としての確立度とは、仁田 (1989) から述べられてきた「真正モダリティ/疑似モダリティ」という指標である。仁田は「発話時」「話し手」という基本的な指標の他に、形式が過去形式や疑問形式を取る場合にはモダリティはより疑似的であると指摘している。

⁴ 検索式: 「ないでほしい」 キー: 語彙素="欲しい" AND 前方共起: 語彙素="ない" ON 2 WORDS FROM キー AND 前方共起: 語彙素="て" ON 1 WORDS FROM キー / 「てほしくない」 キー: 語彙素="欲しい" AND 前方共起: 語彙素="て" ON 1 WORDS FROM キー AND 後方共起: 語彙素="無い" WITHIN 2 WORDS FROM キー⁴ 「てほしくない」の検索式は「てほしくはない」などを想定し2語以内とした。「てほしくなどはない」といった形式も理論上は可能だが本調査では見当たらなかった。「食べてはほしくない」のような形式は本稿の対象外である。

たものが表1である。なお、本稿では非過去形式の「ないでほしい」410例と、「てほしくない」437例を主な考察対象とする。

（表1「ないでほしい」「てほしくない」用例数 括弧内は主文末における数）

	非過去	過去	計
ないでほしい	410 (248)	8 (5)	418 (253)
てほしくない	437 (177)	48 (35)	485 (212)

5. 結果と考察

5.1 文中の位置と後続形式

まず、用例全体を概観するため、両形式の文中の位置について「主文末」「と節」「修飾節」「従属節」「言いさし」「その他⁵」の6つに分類すると表2になる。

（表2 文中の位置）

	主文末	と節	修飾節	従属節	言いさし	その他	計
ないでほしい	248	123	9	16	13	1	410
	60%	30%	2%	4%	3%	0%	100%
てほしくない	177	99	64	61	24	12	437
	41%	23%	15%	14%	5%	3%	100%

「ないでほしい」では「主文末」と「と節」で90%になるのに対し、「てほしくない」では「主文末」と「と節」で64%である。モダリティ表現は基本的に主文末に現れるものであり、「ないでほしい」のほうがモダリティ形式としての確立度が高いことがうかがえる。

5.2 「てほしくない」の意味 ―＜否定的願望＞と＜願望の非存在＞

ここでは「てほしくない」について従来述べられてきた二種類の意味について検証する。3で述べたように、本稿では「ないでほしい」の意味は、その構造から得られるとおり「命題の非存在の希望」であると考え一方、「てほしくない」は「願望の非存在」（ほしいという気持ちの欠如）という構造上の意味ではなく、1つのかたまりとして、より積極的な否定的感情（「やめてほしい」と同義）というモーダルな意味を担っていると考え。

以下、「てほしい」という気持ちの欠如を表す意味を＜願望の非存在＞、より積極的な否定的感情（「やめてほしい」）を表す意味を＜否定的願望＞と仮称し、本データで得られた437例の「てほしくない」について前後文脈から検証した。

その結果、ほぼすべての用例は（5）のように「（～を）やめてほしい」に置き換えても文意が変わらず、「てほしくない」は実際に＜否定的願望＞の意味を表すことが確認された⁶。

（5） 「余計なおせっかいを{してほしくない。/やめてほしい}。われわれの人権と

⁵ 「(略) 赤ん坊を傷つけるようなことはしてほしくないだろう？」（『孤独を抱きしめて』）のような疑問文をここでは「その他」として扱う。

⁶ 「水着は見て欲しい人が着るもの。私は見て欲しくないから水着も着ません。（「Yahoo!知恵袋」）」といった、＜願望の非存在＞にも＜否定的願望＞にも解釈できる用例も1例あった。

か公正とかはもともとこういうものだ」

(『ひとりひとりが築く新しい社会システム』)

また、「てほしくない」には、「てほしくはない」のようにとりたて助詞を入れる形式があり⁷、3で述べたように、先行研究では<願望の非存在>を表すとされる。

しかし、本調査で得られた「ほしくはない」15例のうち12例は、以下の(6)のように<願望の非存在>ではなく、<否定的願望>を表すものであった。

(6) 「白樺派?あんまり概念的にそんな言葉をつかっててほしくはないな。白樺派の文学者といわれてる人たちも、それぞれ違った面があるんだぜ。」

(『青春の門』)

(6)は「つかうのをやめてほしい」と同義であり「つかってほしいわけではない」に置き換えると文意が変わってしまう。すなわち、<否定的願望>を表している。

一方、(7)のように<願望の非存在>を表す用例も3例のみみられた。

(7) 最近主人の友達の奥さんにうんざりしています。我が家で食事したり、旅行に行ったり・・・でも、お礼を言わないんです。(略)・・・別に言ってほしくはないですが、常識だとおもうのですが・・・? (『Yahoo!知恵袋』)

(7)は「お礼を言うのをやめてほしい」はではなく<願望の非存在>を表すが、これは部分否定と対応する表現(「別に」)によるものであると考えられる。

以上、「てほしくない」が実際に担う意味が<否定的願望>であることを確認した。また「てほしくはない」も<否定的願望>を表すが、部分否定の表現とともに使用される場合には<願望の非存在>を表すと考えられる。

すなわち、「てほしい」と「てほしくない」は、その意味について肯定否定の対立をなさないものであることが明らかとなった。

5.3 否定と「てほしくない」

ここでは「てほしい」が「ないでほしい」に比してモーダルな形式としての確立度が高くないことに起因すると考えられる言語事実を検証する。まず5.3.1で「事態や行為の兆候」という観点に着目したうえで、5.3.2で<未然防止>と<現場阻止>という事態の局面的な概念を確認し、5.3.3でこれらの観点から両形式について調査した結果を述べる。

5.3.1 事態・行為の兆候

前述のように、「ないでほしい」と「てほしくない」が常に入れ替え可能でないのは、両形式にモーダルな形式としての確立度の異なりがあるためではないかと想定する。つまり、確立度のより高い「ないでほしい」は聞き手に対する使用範囲が広いが、確立度の高くない「てほしくない」は使用が制限される場合があり、その条件は、否定形式が一般に持つ使用

⁷ ほかに「ほしくもない」3例、「ほしくなどない」1例がみられた。

制限と共通するものであると考えられる。すなわち、否定でものごとを述べるには肯定的な事態が前提として必要であり、「昨日、映画に行かなかったよ」という文が逸脱しないためには＜話者が映画に行く＞ことが聞き手に了解済であることが前提として必要であるように、形式として否定である「てほしくない」も、事態や行為の兆候が必要になると考えられる。

具体的に事態や行為の兆候がある場合とない場合は、以下のように分けられる。

【兆候あり】

- (8) 「ガソリンスタンドにもめし屋にも寄らなくていいよ。あんたにほんとに殺されるかなにかされかねないって勘が働くんだ。だから車は停めないでほしいね。」（『あなたをつくります』）

(8) は前文脈に、聞き手（運転手）の「(略) ガソリンスタンドでもいいし、適当な場所ならどこでもいいが」という発言があり、「車を停める」という事態の兆候が存在している。

【兆候なし】

- (9) 「あの、ミスミ」「何?」「わたしとおかあさんのこと、人に話さないでほしい。人にあまり知られたくないから」（『象のダンス』）

一方、(9) は、聞き手が「話し手とおかあさんのこと」を知った直後の発言であり、前後文脈に聞き手が「人に話す」という事態の兆候はみられない。

5.3.2 ＜未然防止＞と＜現場阻止＞

次に【兆候なし】と【兆候あり】を分類する前段階として、聞き手に対し非遂行や中止を依頼する事態・行為について、どの段階にあるのかという2類の基準を設ける。なぜなら、事態・行為が眼前にある場合には、必ず【兆候あり】になるからである。

①＜未然防止＞用法：聞き手が今後行い得ることを、行わないよう依頼。

- (10) 「一つだけ、お願いがあるの。龍と麒麟に目を入れないでほしいの」
（『蛇にピアス』）

②＜現場阻止＞用法：事態・行為の現場で、聞き手に中止を依頼。

- (11) 「(略) —あなたにはその義務があるはずだ」「義務…?」「しらばつくれないで欲しいな。」（『ヒミツの転校生』）

＜現場阻止＞は眼前に存する事態や行為に言及するため、必ず【兆候あり】となり、「てほしくない」の使用制限はないと想定される。一方＜未然防止＞には【兆候あり】と【兆候なし】のケースがあり、【兆候なし】では「てほしくない」が使用しにくくなると想定される。

5.3.3 事態・行為の兆候 —調査結果

上に述べた観点をもとに、「ないでほしい」「てほしくない」で表される事態の引き起こし手が聞き手であり、かつ主文末で使用された用例についてデータを分析した。

まず、＜未然防止＞か＜現場阻止＞かを分類すると、表 3 になる⁸。＜未然防止＞では、「ないでほしい」が「てほしくない」より 4 倍以上多く、「ないでほしい」が＜未然防止＞の基本形式であると考えられるが、「てほしくない」も 12 例みられた。

(表 3 事態の局面 (事態・行為の引き起こし手＝聞き手、主文末))

	未然防止	現場阻止	その他	計
ないでほしい	54	28	2	84
	64%	33%	2%	100%
てほしくない	12	19	0	31
	39%	61%	0	100%

次に＜未然防止＞用法について、事態や行為の兆候の有無を基準に分けると表 4 になる。

(表 4 ＜未然防止＞用法の兆候の有無 (事態・行為の引き起こし手＝聞き手、主文末))

	兆候あり	兆候なし	不明	計
ないでほしい	19	33	2	54
	35%	61%	4%	100%
てほしくない	10	2	0	12
	83%	17%	0%	100%

【兆候あり】の場合、「ないでほしい」はもちろん、「てほしくない」でも 10 例がみられた。前述の用例も「てほしくない」に入れ替えることができる。

- (12) 「ガソリンスタンドにもめし屋にも寄らなくていいよ。(略) だから車は{停めないでほしいね/停めテホシクナイね}。」 (8) の再掲)

一方、【兆候なし】の場合は、やや特殊な 2 例を除き「てほしくない」は使用されなかった⁹。前述の【兆候なし】の用例を「てほしくない」にすると、【兆候あり】の使用に感じられ、聞き手が吹聴しているのをやめてほしいという意味が付加されてしまう。

- (13) 「わたしとおかあさんのこと、人に{話さないでほしい/#話しテホシクナイ}。人にあまり知られたくないから」 (9) の再掲)

また、前述したように (14) を「てほしくない」に置き換えると唐突に感じられるのも、聞き手が驚くという兆候がないためであると考えられる。

- (14) 「{驚かないでほしい/*驚いテホシクナイ}。実は、企画 PR 課と
いうのは表面だけで、きみにスパイをやってもらいたいんだ (略)。」

(2) の再掲)

つまり【兆候なし】の場合には、「てほしくない」を使用すると、唐突さが否めなくなったり【兆候あり】で使用されたと誤解される可能性があるため、基本的には用いられない。

以上のように、両形式の使用条件について、事態や行為の段階と兆候の有無を基準に用例を分析した結果、「てほしくない」は、事態や行為が未然の段階においては兆候がある場合

⁸ 「その他」とした 2 例は、非過去形式の「ないでほしい」を使用し過去の事態に言及する用例で、この場合過去形式「ないでほしかった」との近接が起こる（「軽々しくそんな言葉言わない{でほしい/デホシカッタ}」（「Yahoo! 知恵袋」）。

⁹ 2 例は「後悔してほしくない」と「忘れて欲しくない」であり、どちらも慣習的に＜現場阻止＞ではなく、＜未然防止＞として使用されるという意味でやや特殊である。

にしか使用できないが、「ないでほしい」にはそのような制限がないことが確認された。

これは、「てほしくない」が、否定形式が一般に有する制限を受けているのに対し、「ないでほしい」は依頼のモダリティ形式として確立していることにより、そのような制限から解放されていることを表していると考えられる。

5.4 前接する動詞の種類

これまでみてきた両形式の特徴は、前接される動詞の種類によって形式の選ばれやすさに差が生じることにも作用すると考えられる。つまり、＜未然防止＞として使用されやすい動詞と＜現場阻止＞として使用されやすい動詞という、いわば語用的な特徴により、一方の形式が選ばれやすくなる場合があると想定される。

そこで、「ないでほしい」「てほしくない」に前接する動詞の全数を調査した。両形式に前接する動詞のうち上位 10 語を表 5 に示す¹⁰。

（表 5 「ないでほしい」「てほしくない」前接する動詞 上位 10 語）

ないでほしい			
	動作主＝ 聞き手	動作主≠ 聞き手	計
1	する	40	66
2	忘れる	11	37
3	言う	16	16
4	思う	5	8
5	来る	3	8
6	成る	3	6
7	使う	4	3
8	止める	4	1
9	決め付ける	3	2
10	出す	1	4

てほしくない			
	動作主＝ 聞き手	動作主≠ 聞き手	計
	する	17	84
	なる	4	24
	来る	0	23
	言う	3	19
	触れる	0	14
	ある	0	11
	いる	2	9
	出る	0	8
	見る	2	6
	入る	1	5

形式の使用数に差がみられた動詞のなかで、ここでは以下の 3 つについて述べる。

①「ある」は「てほしくない」でのみで使用される。

言うまでもないが、「ある」の否定形式として「あらない」が存在しないためである。また、「いる」も今回のデータでは 11 例が「てほしくない」で使用されたのに対し「ないでほしい」は 0 例であり¹¹、「いないでほしい」は選ばれにくい形式であると考えられる。これは、「存在する」という事態が＜未然防止＞としては使用されにくいといういわば語用的な条件が作用していると考えられる¹²。

¹⁰ 「ないでほしい」「てほしくない」で表される事態や行為の引き起こし手が聞き手のものを「動作主＝聞き手」とし、聞き手以外のものを「動作主≠聞き手」として分類する。

¹¹ 「いてほしくない」の 11 例のうち、8 例は存在動詞としての「居る」で 3 例は補助動詞「ている」の用例であった。「ないでほしい」では補助動詞の「ている」を含め、「いる」の使用例がなかった。

¹² 「いないでほしい」が選ばれにくいのは、構造上の理由も考えられる。両形式の構造については 5.6.3 で詳述するが、「いないでほしい」は「いない」という非存在を依頼・希望することにより、「いてほしくない」に比して用いられにくいと考えられる。

②「忘れる」は「ないでほしい」が特に多い。

「忘れる」は「ないでほしい」の用例が48例、「てほしくない」が6例であり、「ないでほしい」に偏重して多くみられた。

- (15) 「あなたの家が地球の裏側にもう一軒あることを忘れないでほしい。何時来てもいれてあげます」 (『パタゴニア氷河紀行』)

特に「動作主＝聞き手」にかぎってみてみると、「ないでほしい」は11例、「てほしくない」は1例のみであった。これは、＜現場阻止＞の文脈（忘れたことに対する非難となる）よりも、相手が「忘れる」ことを防止しようとする＜未然防止＞の文脈のほうが一般的であるという、いわば語用的な条件によるものであると考えられる。

③「思う」は「ないでほしい」が多い。

「思わないでほしい」が13例であったのに対し、「思っでほしくない」は3例のみであった。「思わないでほしい」のうち4例は、聞き手に対し配慮を表す文脈で使用されていた¹³。

- (16) 出品者さんは親切心から電話してきたようですから、驚いたでしょうが、あまり不快に思わないで欲しいです。 (「Yahoo!知恵袋」)

以上のように、ある動詞が使用される際に、＜未然防止＞と＜現場阻止＞で文脈上の使用されやすさに差がある場合、両形式の使用数にも差が出てくることが確認された。

5.5 事態・行為の意味的内容

ある事態や行為の「非遂行・中止」が聞き手にとって利益となる場合、聞き手への配慮を表す表現（以下、配慮表現）となる。この場合「てほしくない」を用いると、むしろ配慮の欠けた文になってしまう。

- (17) 逆に、おかげで体調は回復したので {心配しないでほしい/ ?心配しテホシクナイ} という意味のことが書いてあった。 ((3) の再掲)

- (18) どうぞ、たくさん食べて。 {遠慮しないでほしい/ ?遠慮してほしくない}。

＜依頼＞としての確立度が高い「ないでほしい」は配慮を表す表現としても使用できるのに対し、「動作主＝聞き手」における「てほしくない」の意味は「やめてほしい」と同義である＜否定的願望＞であるため、聞き手への配慮を表すのに適さない形式となる。

前述の例も、話者の母親としての感情を訴えるには、＜依頼＞としての「ないでほしい」ではなく、＜否定的願望＞である「てほしくない」がより相応しいと感じられるのであろう。

- (19) 「あなたは、これから世界を学んでいく人なの。でも、その先生に、テレビを {#選ばナイデホシイ/選んでほしくない} のよ。」 ((4) の再掲)

¹³ 配慮表現については5.5で詳述する。

5.6 事態や行為の引き起こし手

ここでは、両形式で表される事態や行為の引き起こし手に着目し、これまでみてきた両形式の意味的な異なりや使用条件が統語的な観点に起因することを確認する。

5.6.1 事態や行為の引き起こし手が聞き手かどうか

「ないでほしい／てほしくない」で表される「事態や行為（の非遂行・中止）」の引き起こし手、つまり動作主（以下、動作主）が聞き手である場合を「動作主＝聞き手」とし、それ以外の場合を「動作主≠聞き手」とし¹⁴、データを分析すると表6になる。

（表6 動作主と用例数・括弧内は主文末における数）

	ないでほしい	てほしくない
動作主＝聞き手	153 (84)	53 (31)
動作主≠聞き手	257 (164)	384 (146)
計	410 (248)	437 (177)

①「動作主＝聞き手」である用例

(20) 「あなたにここを出ていっててほしくないのよ」 （『不死鳥のように』）

②「動作主≠聞き手」である用例

(21) あいのりを見てる人は何が楽しくて見てるんですか？外国まで行って、日本人のバカさ加減を露呈しててほしくないね （「Yahoo!知恵袋」）

「動作主＝聞き手」では「ないでほしい」153例に対し、「てほしくない」は53例であり、「動作主≠聞き手」では、「ないでほしい」257例に対し「てほしくない」384例であった。これについてカイ二乗検定を行った結果、1%水準で有意差が見られた($\chi^2(1)=71.557$, $p<.01$, $\phi=0.291$)。「動作主＝聞き手」の場合、「ないでほしい」が有意に多く、「てほしくない」が有意に少なかった。また、「動作主≠聞き手」の場合、「てほしくない」が有意に多く「ないでほしい」が有意に少ないことがわかった¹⁵。

本稿ではおおむね先行研究のように、「動作主＝聞き手」で使用された両形式は派生的に＜依頼＞の機能を得ると考えるが、やはり聞き手への働きかけとしての確立度が高い「ないでほしい」が依頼として多く使用されている。一方、「動作主≠聞き手」における両形式の機能は、＜希求・願望＞である。この場合「てほしくない」が有意に多いことから、「てほしくない」の基本義は、＜希求・願望＞であるといえるだろう。

¹⁴ 「(略) 雨は降らないでほしいですね～」(「Yahoo!ブログ」)のような無情物も便宜上「動作主」に含める。また、書き手が読者へ呼びかけるような表現は崔・白川(2010)の「不特定多数の読者に対し書き手の希望を表明しているもの」は、「読者」という行為の実行者としての聞き手を想定したものの、目の前に存在しないため、「働きかけ文」にはならない」という考えに倣い「動作主≠聞き手」とする。ただし特定の相手を想定した用例は「動作主＝聞き手」に分類した。例えば、入れ墨に関する相談に対し「もしも入れるのであれば、本当によく考えて下さい。(略) 私みたいに後悔して欲しくありません。」(「Yahoo!知恵袋」)などである。

¹⁵ 統計分析にはオンライン上の統計ソフトである js-STAR を用いた。
<http://www.kisnet.or.jp/nappa/software/star/>

5.6.2 動作主が明示されるかどうか

(表7 動作主の明示/非明示、括弧内は主文末における数)

	ないでほしい		てほしくない	
	動作主表示	動作主非表示	動作主表示	動作主非表示
動作主＝聞き手	1 (1)	152 (83)	17 (13)	36 (18)
動作主≠聞き手	25 (16)	232 (148)	110 (45)	274 (101)
計	26 (17)	384 (231)	127 (58)	310 (119)
総計	410 (248)		437 (177)	

「動作主＝聞き手」の「ないでほしい」では特殊な1例をのぞき動作主は明示されず¹⁶、明示されないのが基本形式であると考えられるが、「てほしくない」では17例で明示されていた。一方、「動作主≠聞き手」では、「ないでほしい」でも動作主を明示したものが25例みられた。ここからも「ないでほしい」の依頼形式としての確立度が高いことがわかる。

5.6.3 動作主を表す形式

「てほしくない」では、「動作主＝聞き手」「動作主≠聞き手」とともに動作主を「に」で表示する用例が50例みられた。一方、「ないでほしい」では「に」で表示した用例はなかった。本調査の結果から、規範的には母語話者が使用しない形式であるといえるだろう¹⁷。

「てほしい」と「てほしくない」は同様に二格成分をとるが、「ないでほしい」はとらないという現象は、「てほしい」「てほしくない」は(22)のような埋め込み構造を持つが、「ないでほしい」はそのような構造を持たないことの表れであると考えられる。

(22) (わたしは) [彼が来る] ほしい/ほしくない

すなわち埋め込み部分のガ格から二格が要請されるのが「てほしい/てほしくない」であり、統語的観点からみた「てほしい」の否定形式は「てほしくない」であるといえる。

さらに、「ないでほしい」が埋め込み構造を持たないことは、(23)のような、否定と馴染まない表現¹⁸が用いられた「てほしくない」の実例を「ないでほしい」に入れ替えると、文のすわりが悪くなることにも表れる。

(23) 「クラークもぼくも、きみにまた病気に{なっ}てほしくない/??ならナイデホシイから…」 (「不死鳥のように」)

¹⁶ 「アメリカは『一つの中国』政策を支持する」と表明し、「兩岸とも勝手に動かないでほしい。(略)」と、外交ルートを通じて台湾側に要請してきたのである。」(『台湾よ』)という例であり、「動作主＝台湾と中国」「聞き手＝台湾」なので、「動作主＝聞き手」であるという意味で、特殊な例である。

¹⁷ 「には」であれば主題化された成分として許容される。また動作主が事態や無情物の場合、「に」「には」以外の使用が義務的である。

¹⁸ 「彼はまた病気になる」に比して「彼はまた病気になるなかつた」は特殊な文脈を要するという意味で、ここでは「否定と馴染まない表現」とした。

（表8 動作主を示す助詞・括弧内は主文末における数）

	ないでほしい		てほしくない	
	動作主＝聞き手	動作主≠聞き手	動作主＝聞き手	動作主≠聞き手
が	0	6(3)	0	14(5)
から	0	0	0	1(0)
とも	1(1)	0	0	0
こそ	0	0	0	1(0)
すら	0	0	0	1(0)
に	0	0	6(5)	44(14)
にしか	0	0	0	1(1)
にだけは	0	0	0	2(2)
になんて	0	0	0	1(1)
には	0	1(0)	8(6)	13(8)
にも	0	0	2(2)	3(2)
に対して	0	0	0	1(0)
に対しては	0	0	0	1(0)
は	0	17(12)	0	19(8)
も	0	1(1)	1(0)	3(2)
ゼロ形式	0	0	0	5(2)
計	1(1)	25(16)	17(13)	110(45)

6. まとめと今後の課題

本稿では二つの否定形式「ないでほしい」と「てほしくない」について、統語的な側面と意味的な側面から考察を行い、以下のことを述べた。

- i) 「てほしくない」は動詞が表す事態・行為の兆候がない聞き手に対しては使用できない。「ないでほしい」にはそのような制限がない。
- ii) 「てほしくない」は配慮を表す場面では使用できない。
- iii) 「ないでほしい」は構造から得られる意味（＜命題の非存在の希望＞）を表すが、「てほしくない」は構造から得られる意味ではなく、＜否定的願望＞を表す。
- iii) 現象 i) ii) は、「ないでほしい」は依頼のモダリティ形式として確立度が高いが、「てほしくない」は確立度が低い形式であることに起因する。
- iv) iii) は、前接する動詞によって形式の選ばれやすさに差が生じることに作用する。

本稿の結果は、日本語のモダリティ表現についての「モダリティが否定されることはない」という定説がデータにおいても正しいことを証明するものであるといえるだろう。

また、「てほしくない」は否定形式が有する制限を受けるのに対し、「ないでほしい」はモダリティ形式としての確立度が高いことにより否定形式が受ける制限から解放されているという仮説は、他の形式においても検証できる枠組みではないかと考える。

さらに、本稿で対象外とした過去形式については「てほしくなかった」が「ないでほしかった」よりも多くみられ、奥田(1986)で指摘されるような「はなし手のいまの希望をのべて」いる「時間ばなれの現象」であるとも考えられる。過去形式や、さらに他形式についても分析を行い、否定とモダリティ形式全体のありようを捉えることも今後の課題としたい。

引用文献

- 奥田靖雄(1986)「まちのぞみ文(上)」『教育国語』85、pp. 21-32、むぎ書房
- 工藤浩(1989)「現代日本語の文の叙法性 序章」『東京外国語大学論集』39、pp. 13-33、東京外国語大学
- 工藤浩(2005)「文の機能と叙法性」『国語と国文学』82(8)、pp. 1-15、東京大学国語国文学会
- 工藤真由美(1979)「依頼表現の発達」『国語と国文学』56(1)、pp. 46-64、東京大学国語国文学会
- 崔善喜・白川博之(2010)「「てもらいたい」文の強制性」『広島大学日本語教育研究』20、pp. 55-62、広島大学大学院教育学研究科
- 寺村秀夫(1979)「ムードの形式と否定」寺村秀夫(1992)『寺村秀夫論文集Ⅰー日本語文法編』くろしお出版に再掲
- 中右実(1979)「モダリティと命題」『英語と日本語と』pp. 223-250、くろしお出版
- 仁田義雄・益岡隆志編(1989)『日本語のモダリティ』くろしお出版
- 永野賢(1958)『学校文法概説』朝倉書店
- 益岡隆志・田窪行則(1992)『基礎日本語文法 一改訂版一』くろしお出版
- 三井はるみ(2007)「要求表現形式「～てほしい」の共通語としての定着『方言文法全国地図』から見る一」『日本語学』26(11)、pp. 102-110、明治書院
- 宮川和子(1998)「シテホシイとシテモライタイ ーシテホシイの進出・定着ー」『国文解釈と鑑賞』63(1)、pp. 41-50、至文堂
- 森田良行・松木正恵(1989)『NAFL 選書 5 日本語表現文型』株式会社アルク
- 由井紀久子(1995)「シテクダサイとシテモライタイとシテホシイー依頼を表す用法ー」宮島達夫・仁田義雄(編)『日本語類義表現の文法(上)』pp. 220-225、くろしお出版
- 米澤昌子(2015)「てほしい」と「てもらいたい」の使用についてー新聞における用例からの一考察ー『同志社日本語研究』19、pp. 46-58、同志社大学大学院日本語学研究会

(むた あや 言語社会研究科修士課程修了)

